

魂とその浄化

— 『パイドン』における魂の意味—

浅岡 弥生
Yayoi ASAOKA

はじめに

本稿では、『パイドン』における魂不死の証明によって示される魂の意味を考察する。この著作における魂(ψυχή)は、魂不死の最終証明において、不死的・不滅的な存在として捉えられるのであるが、それと同時に、「アイデアと類似するもの」として、アイデア的な性質とアイデア的でない性質(いわば完全性と不完全性¹)とを併せ持ち、また、成長することの可能な存在として捉えられているのではないか。そしてその捉え方によって、「死の練習」として述べられる人間の生は、その「練習」によって充実させられるものという能動的な意味を持つものとして考えられていたのではないか。これらの点について、特に魂とアイデアとの類似という観点から(78d1-84b7)、また、アイデアの諸性質の中で、特に魂の性質とかかわると考えられる「純粋さ」(τὸ καθαρὸν)を主として取り上げて考察する。

¹ 本稿において筆者が用いる「完全性」は、つまり、不可視的で純粋で、「神的で、叡知的で、単一の形を持ち、分解することなく、常に不変で、自己同一で」(80b1-3)あることであり、「存在するもののまさにそれ自体においてあるさま」(83b1)を指す。したがって、本稿で述べる「完全性」の意味は、『パイドン』のみに適用されうるものであって、他の対話篇に関してはこの限りではない。そして筆者はこの「完全性」に関して、特に「純粋」という観点を重視するのであるが、これに関しては後の部分において詳しく述べる。

I. 問題提起

初期ギリシア世界においては、一般的に、魂(ψυχή)は無力な存在として捉えられていたようである。元々、非哲学的な意味での「プシューケー」は、生命活動の全体を指すものであり、そしてまた、肉体に生命を与えるものと考えられてはいたが、しかし一般的には肉体の方が重要な要因と考えられていたので、ψυχήは実体性の希薄な亡霊的存在の域を出るものではなかった。そのことは、ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』の記述にも見て取られるとおりである。例えば、亡霊となって現れたパトロクロスが「煙のように、地の下へと去ってしまった」のを見ながら、アキレウスは「ああ、いかにも、冥王の館にいても まだ魂とか亡霊とかいうようなものがあると見えるな、心気は全く失ったにせよ」と嘆いている(Hom.,*Il.*XXIII.100-104、呉訳)。つまり、ホメロスの世界的世界の靈魂観によれば、我々のプシューケーは死ぬとハデス(あの世)へ行くのであるが、生きている間の我々自身と似た姿をとりながらも実在性の希薄な亡霊で、無力な存在と化してしまう。即ち不死的存在からは程遠いものであった²。元来、ホメロスの世界にあっては、精神と肉体との対立は明確なものではなく、精神を精神として統一的に表す言葉も、肉体を肉体として統一的に表す言葉も見つけがたい状況であった³。また、ギリシアにおいては、肉体の美が崇拜されてもいたようである。つまり、「肉体は物質ではなく生命力の発現であり、外形ではなく内実、断片ではなく全体であった。肉体は魂と切離された存在ではなく、魂の目に見える姿であった」⁴。そして「生ける肉体がそのまま神に等しき力を宿し、魂は肉体とともにあって始めて魂の原義、つまり『生命力』たりうるのである。死んで肉体を欠いた魂は闇間をさまよう、『苦しむものの残影』⁵にすぎない。」冥界に降ったオデュッセウスが聞かされるアキレウスの嘆きには、魂が「苦しむものの残影」として捉えられていたことが如実に示さ

² Hom.,*Od.*XI.218-222をも参照。

³ Vgl. B.Snell,*Die Entdeckung des Geistes:Studien zur Entstehung des europäischen Denkens bei den Griechen*(Claassen&Goverts,1948),Cat.I.

⁴ 大沼忠弘「ソーマ 神像か牢獄か --ギリシア人の肉体観素描--」『理想』1972年2月号 No.465 理想社,77ページ。以下の引用も同様。

⁵ Hom.,*Od.*XI.476.etc.

れている⁶。

また、タレス、アナクシマン드로スに続く、ミレトス学派の哲学者アナクシメネスは、存在者の原理は空気(*πνεῦμα* 氣息)であるとし、「われわれの魂は空気であり、それがわれわれを統括しているように、宇宙世界(コスモス)全体を氣息(プネウマ)と空気が包括している」と述べた(Fr.2)が、ここにおいては、プシューケーは物質的要素によって構成されるものとして捉えられているのである。

このように、初期ギリシア世界においては、肉体(もしくは物質的存在)が第一次的なものとして、そして魂は第二次的な、肉体に付随するものとして、理解されていたわけであるが、このプシューケーに、不死なるもので、肉体よりも配慮すべきもの、という意味を与えたのは、オルペウス関係文献に見られるような考え方であり、それに続くピュタゴラス学派の人々による考え方である。彼らの信条によれば、人間はこの世においては異邦人であり、その魂は天上の世界から肉体(*σῶμα*)という墓(*σῆμα*)へ墜落した存在である⁷。それ故、人間の魂は出来るだけ早くこの輪廻の世界を断ち切って、天上の世界へ帰らねばならない⁸。そしてそのためには魂を浄化しなくてはならない⁹。それまで第一のもの

⁶ Hom., *Od.* XI.488-491. 「私の死を説きすかそうなどしてくれるな、オデュッセウスよ。むしろ私は、他人に小作として仕え、畑の畔で働こうとも、まだ生きたがましと思っっているのだ」。

⁷ Cf. 1B3[8]DK; Bd.1, S.7. ピロラオス「神について語った人びとも、予言者たちも、魂が、ある罰のために、・・・あたかも墓の中に埋葬されているように、身体の中に埋葬されている、と証言している。」

⁸ 58B1aDK; Bd.1, S.451. ディオゲネス・ラエルティオス「・・・また、人間に関することでもっとも重大なのは、魂を説得して善に向かわせるか、悪に向かわせるかということだと彼[ピュタゴラス]は言っている。善き魂がそなわれれば、人間は幸福になるが、けっして静止することも、同じ流れを進むこともない。」

⁹ その浄化のために必要なのが、この宇宙の秩序(天体運動や数学的真理など、宇宙にあって永遠的に見えるもの)を知るように努めることである。またアリストクセノス(生年B.C.370年頃)によると、「ピタゴラス学徒は肉体を浄めるためには医術を用い、魂を浄めるためにはムーシケーを用いた」(58D1DK; Bd.1, S.468)とされる。ムーシケーとはムーサの女神たちの学芸であり、哲学はその最高の部分であると、『国家』においてプラトンは述べている(『国家』548b4-c2, 『法律』689d4-e1)。また、哲学は魂を浄化するためのものであるとプラトンが考えていたことは、『パイドン』にもうかがわれる。

であるとされてきた肉体を、人間にとって汚れとなるもの・悪しきものとして捉え、したがって、肉体ではなく魂に配慮して、これを肉体なるものから浄化し救済しなければならないと考えることによって、ピュタゴラス学派の人々は、それまで考えられてきた「肉体が第一の存在であり、魂はそれに付随する第二の存在である」という観念構造を逆転させるような考え方を示したのである。

そして、オルペウスの考え方やピュタゴラス学派の靈魂観を背景にして、プラトンは、中期対話篇の一つである『パイドン』において、それまでのギリシア世界において一般的に受け入れられてきた靈魂観による捉え方とは異なる仕方で、人間の魂について、特に「知」との関係から、新たな考え方を提示した。『パイドン』においては、魂はまず、「身体に付随しなければ存在できないもの」ではなく、「身体から離在することが可能なもの」として捉えられる。例えば次のような記述から、そのことは見て取られるだろう。

「…思惟が最も見事に働くのは、魂が聴覚、視覚、苦痛、快樂といった肉体的なものにわずらわされることなく、肉体を離れて、できるだけ魂だけになって、肉体との協力も接触も能う限り拒み、ものの真実を追求するときなのだ」

(65c5-9)、そして、「生きている間は、次のようにすれば、知に最も近づきうるだろうと思われる、つまり、どうしてもやむを得ない場合以外は、できるだけ肉体と交わったり共同したりせず、また肉体の本性に染まることなく、神ご自身が我々を解放してくださるまでは、清浄であるよう努めるならば」(67a2-6)。この捉え方は、前述の通り、オルペウスの・ピュタゴラス学派的な靈魂観に対応するものなので、特に新奇な考え方ではないと言える。しかし、魂のこの捉え方を背景として、ここでの魂は、この対話篇において「真実在」(ὄντα)として捉えられる超越的なアイデアと類似するものとして、捉えられることになる。このことは、例えば、

「魂が純粹に自分だけでなにかを考察しようとする場合には、魂はあの、純粹で永遠で不死で不変な存在へとおもむき、そしてそのような存在と同族であるが故に、常にそれと共にあるのではないか」(79d1-3)、「…神的で、不死で、叡知的で、単一の形を持ち、分解することなく、常に不変で、自己同一的であるもの、そのような種族のものにこそ、魂は最もよく似ており、…」(80b1-3)といった記述から捉えられるだろう。この真実在は、物体から離在し、不死であり不変のものであると述べられるのであるが¹⁰、これと同様に、魂もまた、

「知を求めるいとなみ(哲学)こそは最大のムウサイの術」(61a3-4)に他ならず、また、知のためには魂を浄化しなければならないとソクラテスは語っている(66d7-67b2)。

身体から離在可能で、不死であり不変な存在に類縁するものとして語られる。そして最終的には(105b5-107b10)、魂はそれ自体、不死で不滅なものとして語られるのである。

しかし、たとえ魂が不死で不滅な存在と認められても、アイデアの持つ純粹性を、それ自体本質的に持つとは、いまだ言われていない。なぜなら、魂それ自体はアイデアそのものではなく、それはあくまで「アイデアに類似したもの」であり、また、それはアイデアとは異なって、現実には肉体に内在しているものだからである。そしてまた、この著作において魂に要求されていたのは、その浄化¹¹であり、すなわち純粹な状態になることだからである。では、魂がアイデアの純粹性に近似したものになるためには、いかにすればよいのか。『パイドン』の中でソクラテスは言う、そのためには、魂を肉体から解放し、いわば、死んだも同然の状態にあるように努めねばならない、と(66d7-67b2)。しかし、ここでソクラテス、というよりむしろ、その口を借りて語るプラトンは、ただ単に死を肯定し、生を否定しているのではない。それは次の言葉から明らかであろう。

「魂が不死であることが明らかな以上、魂にとっては、できるだけすぐれた賢いものとなる以外に、悪から逃れることも救われることもできないであろう。魂がハデスへ行くにあたって持っていくものは、ただ教育と教養だけであって、これらのものこそ、死者にとってあの世への旅の門出から直ちに、最大の利益ともなるし災いともなると言い伝えられているものだ」(107c8-d5)。

つまり、生前における魂の修養やその努力が必要であるということ、この言葉は意味しているのではないかと考えられるのである。すなわち、ここで述べられていることは、純粹なものとしてのアイデアと類似する存在である魂が変容的な性質、つまり非純粹性を持ち、その変容的な非純粹性を魂が持っているからこそ、その性質から魂を浄化する必要が生まれ、その浄化のための修養や努力を生前になすことが必要となる、ということではないだろうか。そしてこ

¹⁰ Cf. 「純粹に自分だけで存在する」「おのおのの存在の本来的なもの」(78d1), 「何らの変化をも、受けることがない」(78d6-7), 「存在するもののまさにそれ自体においてあるさまを・・・」(83b1), 「神的で清浄で単一な形を持つもの」(83e2-3), etc.

¹¹ 「浄化とは、…魂をできるだけ肉体から切り離し、そして魂が肉体のあらゆる部分から自分自身へと集中し、結集して、いわば肉体の戒めから解放され、現在も、未来も、できるだけ純粹に自分だけになって生きるように、魂を習慣づけることを意味するのではないか」(67c5-d2)。

れにより、プラトンにおける靈魂観が、生を肯定した動的なものであることを示すことができるのではないだろうか。以下の部分において、この問題について考察していくのであるが、まずⅡ.において魂とイデアとの関係を、類縁性による魂不死の証明によってこれを述べた二つの議論をもとにして述べる。そしてⅢ.において、魂とイデアとの類似と相違とから導き出される魂の意味について、「浄化」という観点から特に重要と考えられる「純粋さ」に焦点化して、述べていくことにする¹²。そしてその考察の上で、あらかじめ予想的に述べるとすれば、魂における完全性と不完全性との両立、すなわち純粋性と非純粋性との両立を、プラトンがあらかじめ認めていたということ、つまり、魂の非純粋性を、人間にとっての必要悪のようなものとして、プラトンは捉えていたということをも、示すことができるのではないかと考えるのである。

Ⅱ. 魂とイデアとの相違

『パイドン』における魂とは、一体どのようなものとして捉えられているのか。これに関して、特に、魂とイデアとの関係について、M.C.Beckは次のように述べている(Beck 1999, pp.99-104)。

Beckによれば、魂不死の証明の三つのうち、特に類縁性による証明(the argument for immortality based on dualism)の部分において、ソクラテスは、魂がイデア(a thing-itself, 「ものそれ自体」「存在の本来的なもの」)に「より似ている」ことを証明しようとしているのであって、イデア「である」ことを証明しようとしているのではないことが重要である。そのことは次のような箇所から見取られる。

「…魂はどちらの種類により似ており、種族的に近いのかね」。「誰でも、…魂はあらゆる意味で、不変でないものよりも、常に不変であるものの方により

¹² しかしPhd.においては、「純粋さ」のみが、イデアに存在して魂には存在しないような性質なのではない。実際、イデアは存在するすべてのものに普遍的であるが(cf.75b4-8,c7-d5)、他方魂はそれぞれの存在にとって個別的であるとみなされているからである(cf.81c8-d4,82b10-c1,etc.)。その点を加味した上で、本論において特に「純粋さ」について考察しようとするのは、筆者が浄化という魂の純粋性へ向かう過程を重視するという理由からである。なぜなら、その「浄化」という過程が、「プラトンの靈魂感が、生を肯定した動的なものである」という、筆者が想定する仮説と、かかわりがあるのではないかと考えられるからである。

似ている、ということに同意するだろうと思われます」(79d10-e6)。

「それでは、魂と肉体とが一緒にいるとき、自然は、後者に対しては、隷属し支配されることを命じ、前者に対しては、支配し主人たることを命じているという点からも考えてみたまえ。ここからも、どちらが神的なものに似て、どちらが死すべきものに似ていると思われるかね。本来神的なものは支配し導くことに、死すべきものは支配され隷属することに、適するとは思わないかね」(79e9-80a5)。

「それなら、…これまで言われてきたすべてのことから、次のような結論に達するのではないか。すなわち神的で、不死で、叡知的で、単一の形を持ち、分解することなく、常に不変で、自己同一的であるもの、そのような種族のものにこそ、魂は最もよく似ており…」(80a10-b3)。

また、魂が感覚的・物質的事物でもあり得ないということを強調する記述として、次のものが挙げられる。

「…魂が清浄な状態で肉体を離れる場合、この魂は肉体的なものを何一つ引きずっていない。これは、魂が一生の間、自分から進んで肉体と共同したことはなく、肉体を避けて、自分自身へと集中してきたからであり、このことをいつも練習してきたからである。…魂はこのような状態にあれば、自分に似た不可視的なもの、神的で不死で叡知的なものの世界へと去って行き、そこに至ると、幸福を得て、放浪や愚かさから解放され…真に神々と共に生きるのではないか」(80e2-81a10)。

これらの点で、魂が、感覚物でもなくイデアでもない、第三の存在である、とBeckは述べるのである。

また、彼女が「魂を第三の存在である」と主張する理由として、この証明において、ソクラテスは、魂は肉体と一緒にあって、感覚を通して探究することができるか、理性と一緒にあって、魂それ自身だけで探究することができるかである、と述べることによって、変容するものであり一定でないものとして、つまり、二つの可能性を有するものとして、魂について証明していることを述べる。そのことが表されている部分として、以下の部分が挙げられる。

「…肉体の助けを借りてなにかを考察する場合…魂は、肉体によって、瞬時も同一でない事物の方へ引っ張られ、そして魂自身さまよい、かき乱され、まるで酔ったようにふらふらする」(79c2-8)。「魂が純粹に自分だけでなにかを考察しようとする場合には、魂はあの、純粹で永遠で不死で不変な存在へとおもむき、そしてそのような存在と同族であるが故に、常にそれと共にあるのである」(79d1-3)。

一方では、魂がそれ自身だけであるならば、不変で純粋なものへと自身を方向付ける故に、魂はアイデアに「より似ている」と述べられている。しかし他方では、魂は、感覚物が持つような性質を多く持っている¹³故に、「アイデアそのもの」であることはないとも述べられているのである。なぜなら、魂は、肉体を使用して探究できるものであるとともに、魂それ自身で探究できるものともされているからである。これはつまり、魂が可變的(variable)であることを示している。また、(特に人間の)魂は、感覚物の方に向かうか自己自身に向かうかを、自身で選択するという能力を持っている点でも、感覚物とも、アイデアとも性質的に異なる、と彼女は述べる。さらに彼女は、『パイドン』における魂の固有の能力として、知識を探求し獲得する能力を挙げている。この点でも、感覚物もアイデアも、この探求の対象であるから、やはり魂とは同一とはならないのである。

これに対して、D.Apolloniは『パイドン』における類縁性による証明を以下のように整理している(Apolloni 1996, pp.5-32)。すなわち、存在するものには少なくとも二種類があり、一方は、可視的で、常に同一ではなく、死すべきものの種類であり、もう一方は、不可視的で、常に同一で、神的なものの種類である。しかるに、人々は魂そのもの¹⁴を、感覚を通して知覚することはできないし、また、魂は本性上理性的であるので、二つの相反する事柄(例えば、「xは(性質)Fである」と「xはFではない」)を、感覚が知覚する仕方とは異なって、同時に思考することはない。このように、魂は観点上の変化(aspect-change)¹⁵、すなわち、二つの相反するものがその内に共に存在する(opposites are compresent)ことを受け入れない。そしてまた、魂はその活動に関して、他の何物にも依存しないという点で神的である。以上の点から、したがって、魂は不可視的で常に同一で神的なものであることになり、先に述べた存在の二つの種類のうちの後者の持つ決定的な特徴をそれが持っている点で、そのような種類の存在に最

¹³ "the soul ... has many of the same attributes that sensibles have." p.99.

¹⁴ Apolloniは、魂には、知性the intellectが働くことなく、感覚的要素に満たされるということもあるという理由から、魂を知性として考えている。また、魂に不可欠な要素として残されるのは知性のみであるという理由で、ソクラテスは知性を魂として言及している、とApolloniは述べている。pp.15-16.

¹⁵ これは自己の変化(self-change)、つまり、自己自身の性質的変化(qualitative alteration)を意味するものに対置され、状況や観点における相対的变化を意味する。p.16.

も類似していることになる。そして、このような特性を持つ存在物は非合成的であり、したがって解体もしないので、それゆえ、魂もそれ自体で非合成的であり、解体しないのである。

しかし、魂(つまりその非知性的部分)が、感覚の伝える矛盾をそのまま受け入れ、感覚世界に愛着を示す限りにおいて、魂はこの世界にくっつけられることになり、二つの「部分」(parts)、すなわち物質的部分とそうでない部分、とから構成されることになる。つまり、魂が非理性的な信念を持ちうる限りにおいて、それは物質的でありうるのである。そしてまた同時に、魂は、形而上学的に究極の存在としてのイデアの知識を持ちうる知性的存在でもありうる。なぜなら、魂は、観点的に同一(aspect-the-same)であるところの感覚対象(すなわちイデア)を知る限りにおいて、それ自身もまた観点的に同一でなければならない、とソクラテスは推論しているからである。D.Gallopはこの理由として、ソクラテスがこの類縁性による証明において、エンペドクレスの「似たものは似たものを知る」という理論を仮定していることを示唆しているが¹⁶、Apolloniはこの考えを退けている¹⁷。彼によれば、むしろ、魂は「純粋なもの」(τὸ καθαρὸν)に関わる限りにおいて、それ自体純粋に自分だけとなって、同一な状態を保つのである(cf.79d1-7)。真実在を捉えるためには、「ただみずからがみずからにおいてのみあるというその思考を、まさに純粋なるままに用いて、おのおのの存在を---ただそれ自身がそれ自体においてのみあるというその純粋なるかたちのままに---狩猟しようところみ」ねばならない(66a1-3)。そしてまた同時に、相反する性質を持たないという点で「純粋な」イデアを思考するゆえに、魂もまた純粋なのである。このようにApolloniは考えるのである。

Beckの解釈とApolloniの解釈の両者から共通して言うことができるのは、魂は物質的要素とイデア的要素とを、異なった条件の下で持ちうるということである。そしてまた、それらのどちらの要素に強く支配されるかは、その魂を持つ人間の、魂の浄化のための修養に依存しているという点で、だからこそ、人間にとって、生前において、魂を浄化する努力が必要であるということを示唆している。すなわち、彼らの解釈に従えば、魂は、浄化という自己の完成の可能性を持った存在として捉えられることになるのである。

しかし、ここで問題となるのは、Beckが魂を第三の類として考えたのに対し

¹⁶ Cf. Gallop, *Plato: Phaedo*, p.140.

¹⁷ 詳細な議論は、pp.19-22参照。

て、Apolloniは、イデアの種類に魂は属するのであり、それ以外の何物にも属することはないと考えた点である。なぜなら、ここにおいてApolloniは魂を第三の種類(「それ独自のあつ一つの種類」(a kind of its own))としても「内在性質」(immanent characters)としてもとはせず、あくまで上記の二種類の存在物のどちらかに属するものとするからである。少なくとも魂が内在性質的なものではないことの根拠として、Apolloniが述べているのは、内在性質が、物質的な状態の変化によって、存在することをやめてしまうという点である。例えば、パイドンとの比較上のソクラテスの「大」は、パイドンが大きくなれば、存在しなくなるからである。魂は他のあらゆる事物から独立しているのであるから、それが内在性質であることはありえない、と彼は考えているのである(p.30)。この点でBeckとApolloniの靈魂観は相違すると考えられる。

Apolloniにとって、魂の本質はあくまでもイデア的なものであり、不純物(身体的なもの)はそれに付着したものと彼には考えられているようである。『パイドン』においては、魂の不死・不滅が証明されることが求められていることから、確かにこのような「魂=イデア的」、つまり「魂の本質(つまり性質の核となるもの)はイデア的である」という解釈は可能であると考えられる。しかしやはり、魂が身体に内在していることは事実であると考えられるし、『パイドン』においてもそれは認められている(cf.66b5-c1,81c8-d4)。その点で、魂は変容的性質を持ちうる存在であり、魂の非純粋性は、生前においても、また場合によっては死後においても、保持され続けると考えられる。すなわち、身体に内在しているからこそ、魂は未だ可變的で純粋性を欠いたものなのであり、また、魂が変容的であるからこそ、「浄化」によって純粋と「なりうる」存在であるのではないか。それ故に、魂の浄化が必要になると考えられるのである。これについて、以下において更に詳しく論じることとする。

Ⅲ. 『パイドン』における魂の純粋性と浄化

『パイドン』においては何ゆえに、自己の完成という意味を含んだ魂の「浄化」(κάθαρσις)が、必要であると主張され続けるのか。すなわち、魂がイデア的な存在になるための過程として、なぜ「浄化」という言葉が用いられるのか。その理由として、確かに、オルフィズムやピュタゴラス学派による、前述の宗教的思想が関わっていることは挙げられるだろう¹⁸。しかし、そのような宗教的理由だけがすべてではない。『パイドン』において、しばしば「この世のもの

のとは関わらないもの」として述べられるイデアの性質である純粋性(καθαρόν)との親密な関係が、この「浄化」の観念に関わっているのではないだろうか。

まず、存在するもののイデアについて「純粋な」と語られる場合¹⁹、それは具体的に、どのような意味を持つと考えられているのか。それはすなわち、1. それ自身としてあること(いわば肉体的なものから独立していること)、2. 混じりけがないこと(肉体的なものを自身のうちに含まないこと)を意味すると考えられる。そして、「純粋な」のこれら二つの意味が、存在するもののイデアの性質を示す、最も基本的なものとなるであろう。なぜなら、「純粋な」と同時に、存在するもののイデアの性質を示す言葉である「不変的な」や「神的な」は、そこから派生したものであると考えられるからである。というのは、存在するもののイデアが不変で常に同一であるのは、不変的なものが肉体的なもの(すなわち可変的なもの)を含まないからであり、また神的であるのは、神的なものが肉体的なものから独立しているからである²⁰。また、同じくイデアの性質を示す言葉である「不可視的」に関しては、Beckが指摘しているように²¹、不可視

¹⁸ Cf. Burnet, p.38, ad.67c5, Bluck, p.52, pp.195-6, Suppl.N.5. Bluckにおいては、身体からの魂の解放を浄化とみなす点でOrphicであると述べられている。しかし同時にまた、真実在の観得を浄化の目的とする点においては、OrphicではなくむしろPlatonicであるとも、ここでは述べられている。

¹⁹ つまり、「存在の本来的なもの」であるイデアについて語られる場合。イデアに関しては、魂に関して言われる特徴と共通のものが言われるのであるが(cf.80b1-3, etc.)、更に、この世の個々の事物には内在せず、可変的なものとかかわりを持たないような、超越的存在としての特徴が加えられる(cf.66d7-67b2, 75c10-d5, 76d7-e7, etc.)。この点で、イデアはある種の絶対的な完全性を持つといえようが、しかし、魂は、述べてきたように可変的であり、なおかつ非純粋的でもありうるので、いわば相対的な完全性しか持ち得ないのである。詳細については後述する。

²⁰ Cf. Apolloni, p.22.

²¹ Cf. Beck, pp.95-96. しかしBeckは結論的に、この「不可視的な」という言葉が、単に「目に見えない」という意味ではなく、「人間の五感によっては知覚できない」という、より広義の意味を持つものであると解釈している。そのことは、「聞くことと見ることは、その他の感覚と比べてより正確なものである」という記述(65b4-7)によっても、確かに明らかである。しかし、上述の事例が挙げられる以上、「不可視的」をイデアの性質において最も基本的なものとは、いずれにせよ考えられないのではないか。この理由により、ここでは本文のように結論しておく。

的ではあるが感覚的な事物(例えば、音や匂い)が存在することから、この言葉をアイデアの性質の最も基本的な意味を示すものとは考えにくい。したがって、純粋性は、アイデアの性質を意味する最も根本的な言葉であり、純粋な魂は、すなわち、いわばアイデア的な魂を示しうるものであるから、魂が純粋な存在になるためのプロセスであるところの「浄化」が、その言葉のままに、用いられることとなったと考えられるのである。そして同時に、魂を浄化することが、自己を完成させることにつながっていくのである。これについても、純粋であることが、『パイドン』において、存在するもののアイデアの性質を示す第一の指標であることに起因している、と考えられるからである。

プラトンは、『パイドン』の魂不死の証明において、万物の原理であると彼が考えるアイデア(真実在)と魂とを類似するものとして述べている(78b4-84b7)。つまり、プラトンはまず、原理であり探求の対象であるアイデアを、不可視的で「純粋で永遠で不死で不変な存在」(79d1-2)、つまり物質とは異なる存在と位置づけるのである。そして、魂が清浄となって、「自分[=清浄な魂]に似た」不可視的・神的で不死で叡知的なものの世界へ至ることが幸福であると述べる(81a4-8)。ここから、清浄な魂は、物質とは異なるアイデアに近いものと考えられており、そこから、魂それ自体がアイデア的性質を持ちうる存在と考えられていると言えるのである。また、魂が清められるのはそのアイデア的なあり方に近付くためであるから、アイデア的なあり方が魂における終極目的として捉えられている(80d5-81a10)とも、また同時に、そのアイデア的なあり方を目指しているという点で、魂は自己の完成を目指しているのだとも、言えるのである。

しかし、アイデアを分有するものであり、かつ身体と接する以上、魂は性質的にアイデアに類縁して不死や不滅という性質を持つとはいえ、アイデアの性質すべてを、特にその純粋性を、本性的に持ちうるとは言えない。肉体と結びついた・浄化し切れていない魂が可視的な世界に留まることがそれを例示している(81c8-d4)。したがって、魂にとってアイデアの持つ性質である純粋性を自己に実現するためには、ただそれを希求するのみでなく、哲学による自己の浄化の努力、つまりアイデア(真実在)を知ることができるようになるという、自己の完成への努力が必要となるのであり、プラトンもこのことを強調している(66a1-8,80e2-81a2)。そして、自己にアイデアの性質である純粋性を実現することによって幸福を得ると考えている点で、プラトンの靈魂観は、自己完成の過程としての生に積極的な意味を与えると考えられるのである。

そしてまさに、『パイドン』の靈魂観の独自性は、自己の完成を目指す魂を示している点にあると考えられる。『パイドン』における魂が目指したものは、

肉体から浄化された状態であった。それは死後において初めて実現される(66d7-67b2)。なぜなら、生前においては身体と魂は結びついた状態にあるからである。しかし、その魂の完成の実現は、生前においてその状態に近づくべく努力することなしには、達成され得ない。なぜなら、「神々の種族へは、哲学を学んで、全く浄化されて世を去った者以外は、入ることを許されない」(82b10-c1)からであり、また、「もし魂が不死であるなら、われわれが人生とよぶこの期間だけでなく、全時間にわたって、魂の世話をしなければならぬ…そして、もしこの世話を怠るなら、その危険は今や恐るべきものに思われるだろう。なぜなら…魂が不死であることが明らかな以上、魂にとっては、できるだけすぐれた賢いものとなる以外に、悪から逃れることも救われることもできない」(107c2-d2)からである。したがって、死後における全くの心身分離の状態に到達することを目指して、人生の中でそれに近づくよう、真実に関する知恵の獲得を真に求める者(哲学者)は努力する。そしてそれによって、その人生自体を価値づけることが出来る。つまり、魂が自己の完成を目指すということは、死の状態を究極的な理想として目指すことになるが、しかしその努力が逆にその生に意味を与えることになるのである。人間の生の目標として自己の完成を設定し、それに向けて努力することの必要性を導き出したこと、その自己の完成への努力という過程によって現実の生を価値あるものとし、またその努力の程度によって、人間には自己実現やそれによる幸福に関して無限の可能性が開かれていることを示したこと、これらが『パイドン』の魂の意味の最も独自の点であると考えられるのである。

以上のことから、『パイドン』においては、魂とは、アイデアの性質でありその魂が基本性質としては持たないところの純粋性を希求し、それに自身を近づけようとする存在であって、それ故に、生が肯定的に考えられていることが、明らかになったと思われる。しかしながら、ここで同時に明らかになることがあるように思われる。それはつまり、やはり魂はアイデアに「類似した」存在であり、純粋性を「持つ可能性のある」存在に過ぎないということである。すなわち、魂はアイデアに類似した存在であるから、その性質である純粋性を持つ可能性があると考えられる。しかしまた同時に、それがアイデアに類似した存在であるからこそ、純粋性を持たないままであるという可能性もあると考えられるのである。したがって、人間の生という段階において魂が非純粋的な状態であることが、改めて露呈されたことになる。だが、この非純粋性が存在しなければ、それを浄化し、純粋な存在にできる限り近づく努力をするという過程はなくなってしまう。現実の生を価値づけるためには、やはりこの非純粋性が必要

なのである。

ただ、魂における非イデア的性質(すなわち非純粋性)が、『パイドン』において、「魂がその本質として持つべき」性質としてある種肯定的に認められているとは、未だ必ずしも言えないように思われる。というのは、『パイドン』では、心身の対立という図式の下に、魂はあくまでも「浄化されるべきもの」として捉えられており、非純粋的な性質はあくまでも魂を混濁させるものに過ぎず、魂の本質として含まれるような、或る役割を担った一部分としては見なされていないとも言えるからである。この点については更なる考察が必要であると考えられる。

(京都大学・西洋古代哲学史・修士課程)

参考・引用文献

『パイドン』からの引用は主として池田美恵訳(新潮文庫、1968)によったが、解釈上、松永雄二訳(岩波版全集1所収、1975)や岩田靖夫訳(岩波文庫、1998)によった箇所もある。また、引用の都合上、筆者により適宜改変された部分も、若干含まれている。

D.Apolloni, "Plato's Affinity Argument for the Immortality of the Soul", *Journal of the History of Philosophy* 34(1996), pp.5-32.

M.C.Beck, *Plato's Self-Corrective Development of the Concepts of Soul, Forms and Immortality in Three Arguments of the Phaedo*, Lewiston, N.Y., 1999.

R.S.Bluck, *Plato's Phaedo*, London, 1955.

J.Burnet, *Plato's Phaedo*, Oxford, 1911.

H.Diels-W.Kranz, *Fragmente der Vorsokratiker*, Weidmannsche Verlagsbuchhandlung, Zürich, 1951.

D.Gallop, *Plato: Phaedo*, Oxford, 1975.

R.S.ブラック『プラトン入門』 内山勝利訳 岩波文庫 1992.

F.M.コーンフォード『ソクラテス以前以後』 山田道夫訳 岩波文庫 1995.

内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』第I分冊 岩波書店 1996.